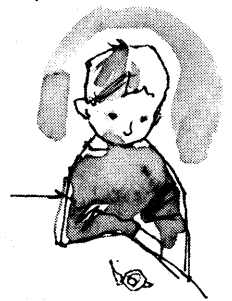


私の保育

―失敗が失敗とわからない二年間―



太田 一枝

一、はじめに

「松阪市教育委員会勤務を命ずる」―昭和四十六年四月一日
―この辞令で私と幼児との出会いが始まりました。

幼児教育者を志してから数年、ようやく念願がかない、その
第一歩をふみ出せると、大きな期待と少しばかりの不安を胸に
この日を指おり教えて待っていました。

「幼稚園」という言葉のムードを楽しみながら、どんな幼児
たちがいるかしら？ どんなことをしてあげたらいいのかしら
私になついてくれるかしら？ 四月にはこんな歌を教えてあげ
たい、夏になったらこんな遊びをしたい、お部屋にこんなかざ
りをして……と頭の中であれやこれやと考えながらその想像に

酔っていました。

二、プール教員の辞令を手にして

(産休病欠などの補助教員)

ところが幼稚園教諭として採用されたはずなのに「教育委員
会勤務」となっているのです。私はいったい何をすればいいの
かしら？ 私は驚きとともに、なんとも言えない悲しい気持ち
にさいなまれ、こんなはずじゃなかった、私の夢や期待がガラ
ガラと音をたてて崩れていくような気がしたのです。

このプール教員は電話一本で市教委より勤務先を指示され、
その園へとんでいくわけです。そのため、今度はどこへまわさ
れるんだろう？ という不安がいつも心のどこかにひっかかっ

ていて、私の一日二十四時間すべてに安定感というものが感じられなかったのです。

新しい次の職場でまず突きあたるのが、そこでの幼児との人間関係、職員同志の人間関係です。少しでも早くその職場になじもうと、一生懸命努力をするのですが、人間として、保育者として未熟な私には、かなりの時間を要するのです。たとえば、九月にもなると幼児の側では、先生は当然自分のことをよく知っていてくれるものと思っているのに、私にはひとりひとりの幼児の家庭のようすまでもわからないために、幼児からの話しかけにもあいまいな受け答えしかできず、幼児の口からは「僕らの先生はいつくるの？」ということばが返ってきます。こんな時、私は自分だけのクラスをもちたいとひしひしと感じました。

このような失敗を重ねながらも、少し慣れたかな、と思うころにはまた電話一本でもう次の職場へ出勤しなければならぬのです。

このように、常に不安とイライラの気持ちをもちながら幼児たちと接していったのです。教師自身が常に不安定なため、幼児たちの感情を受けとめてあげるどころか、ひどい時には自分の感情をむき出しにしまい、そのあとはこんな自分への腹だ

たしきで涙と口惜しきでいっぱいになってしまいました。また、それぞれの職場で先輩たちが議論されていることを聞きかじり、幼児教育の専門用語を私は一生懸命ひろいこみました。

例をあげると、幼児の感情を受容する、幼児との出会いを大切に、一日の流れは水の流れの如くに、教師の外罰的思考は幼児の成長にはプラスにはならない等々。これらのことばを覚えることが勉強であるとも考え、フリー職員の学べる場とさえ考えておりましたが、今になって思えば、ひとつひとつの言葉と幼児の具体的な行動が結びつかず、学生時代の試験のための勉強みに自分自身の充実にその言葉が役立っていなかったのです。

産休明けの先生が出勤されたその日から、私の前をとおろぎていく幼児の姿に自分はこのクラスの担任ではないという寂しい気持ちとともに、何をしたらいいのかわからないという日が続くのです。

幼児と生活するときには、最初から順序だてて先輩の先生方の指導が受けられ、見よう見まねから少しずつ自分のものを見いだしていけるといのが私のねがいであったのに、地域における幼児の生活のちがいや、園舎など施設を含めた種々の教育条件のちがうところで、こま切れるに指導を受けても、一年間

の保育の見通しがない私にとっては、まったくわからないことばかりが、続きました。

三、やっと 級を担任して……

このような気持ちの中で、長いようで短かった一年が過ぎていきました。

一年間いろいろな園で得たことを、今年こそは幼児の発達をみながら、経験豊かな先輩の指導が受けられると期待して二年目を迎えました。ところが、昭和四十七年度の人事異動でも、例年新採用の者や経験のすくない者は、交通の便の悪い周辺部の公立小の併設園へ配属されるという例にもれず、経験年数のほとんどちがわぬ者ばかり三名という半農半漁村の松阪市立西黒部幼稚園への着任が決まったのです。

はじめての四月、担任する幼児たちの入園準備、幼児を受け入れるための環境を整えなければならぬのに、

・入園当初はどんな遊具をいくつぐらい用意すればいいのかしら？

・粘土はどこへ置こうかしら？

・ままとコーナーはどこへ？

・絵本はどんなものをおけばいいのかしら？

・連絡ノートは何を連絡してあげればいいのかしら？

このような自分の質問に対して答えがとっさに頭にうかびません。昨年度一年間、各園を回っている間に、それぞれの園で充分配慮されていたであろうことが、自分の経験したことからきた解答として出てこないのです。

ただ私の頭の中には、

「あつ はさみは共同で使っていたかなあ……」

「自由に描いたり、製作するコーナーがあったなあ……」と次々に各園のようすが断片的にばかりうかんでくるのですが、さて、それはなぜそうされたのか、教師のねがいや意図が全く汲みとれないままだったことに、今ごろになってようやく気がついてきました。一番困ったのは、四歳児を担任して、二年間の保育内容（幼児の活動）の見とおしがなかったことでした。そのため、次のような失敗が多くありました。

四、自分の失敗を幼児のせいにしてしまったこと

二月のある日、

隣の部屋で、五歳児がたのしそうに紙版画あそびをしているのを見て、私の組の四歳児たちは、「僕もしたい」「僕もしたい」と口々に要求を出してきました。そこで私は、このような幼児

の発達にあっていなくても、教師が困難な点をお手伝いしてあげれば良いということ聞きかじっていたので、紙版画をすることにしました。そこでさっそく昨年度の経験を生かし、四歳児であるから、台紙を五歳児にくらべ半分の大きさ（全紙1—16の大きさ）で鬼の顔を作ることになりました。このようにして、五歳児のよろこんだ活動を四歳児に経験させてみたのですが、鬼の顔を作るといふことを、四歳児は、

「鬼には キバがあるんやぞ」とか

「つのがあるんや」など

部分々々でしかとらまえずに、鬼というイメージが自分の印象が強い所だけの表現になってしまいました。

教師としては、五歳児の作品からくるイメージがどうしても強くて、四歳児の表現の特徴がわからず、その仕事の途中での助言や、手伝ってあげる場所も教師自身がわからなくなり、結果的には教師自身がその表現に失望してしまつたのです。

そのあと、このことを先輩に話したところ、一口に幼児がうつつしてあそぶ”といつても、さまざまな活動を発達にに応じて経験させてあるから、紙版画も積極的に楽しむことができののだと、教えてくださいました。私はそれを聞いて、幼児の活動だけをみて、自分のもっている経験の浅さにも気付かずに、

幼児が要求したとか、喜ぶとかいうことだけで、全体の見とおしもなく五歳児の活動を単純に四歳児に経験させ、その作品がよくないのを四歳児という年齢のせいにしておりました。

そのほか、四歳、五歳の幼児の発達の見通しができないため、一年間の指導計画が立てられずその場かぎりの活動が多く、全く自分自身の感情をむき出しにした保育に終わってしまったような気がするので。

六、おわりに

こんな現実には直面して私は、去年の一年間はいったい何をしてきたのだろうか、何が私に残つたのだろうか。経験のないものが、プール制教員としてまわることは、行政的には当然の措置ではあるが、この私のような教師と出会つた幼児たちにとつて、充実した幼稚園生活であつただろうか？

このような感情をもちながら、張り切つて担任した四歳児を年長組にして、本年度、桜の花の咲く門を真新しいスモックを着て登園する四歳児を再び担任した今、あやまちをくり返さないでおこうと心に誓つて、ひとりひとりの幼児を迎えています。

（大阪市西黒部幼稚園）